

今昔物語

卷第
30

特40

594

今昔物語集卷第三十

本朝付雜事

平定文假借本院侍從語第一

會平定文女出家語第二

近江守娘通淨藏大德語第三

中務太輔娘成近江郡司婢語第四

身貧男去妻成攝津守妻語第五

大和國人得人娘語第六

右近少將□□行鎮西語第七

大納言娘被取內舍人語第八

信濃國夷母^姨弁山語第九

住下野國去妻後返棲語第十

品不賤人去妻後返棲語第十一

住丹波國者妻讀和歌語第十二

夫死女人後不嫁他夫語第十三

人妻化成弓後成鳥飛失語第十四

平定文假借本院侍從語第一

今昔兵衛の佐平の定文と云ふ人有けり字をは平中と云む云ける品も
不賤す形ち有様も美かりけり氣はひ何とも物云ひも可咲りければ
其の比此の平中に勝れたる者世に无かりけり此る者あれば人の妻娘
何に況や宮仕へ人は此の平中に物不被云ぬは無くして有ける而る間
其の時に本院の大臣と申す人御けり其の家に侍從の君と云若き女房
有けり形ち有様微妙くて心はへ可咲き宮仕へ人にてなむ有ける平中
彼の本院の大臣の御許に常に行通ければ此侍從の微妙さ有様を聞て
年來艶す身も替て假借けるを侍從消息の返事をたに不爲ければ平
中歎き侘て消息を書て遣たりけるに只見つや許の二文字をた見せ
給へと終返り泣々と云ふ許に書て遣たりける使の返事を持て返來

たりければ平中物に當て出會て其の返事を急き取て見ければ我の消
息に見つと云ふ二文字をたに見せ給へと書て遣たりつる其の見つと
云ふ二文字を破て薄様に押付返^遣てたる也けり平中此れを見るに彌よ
妬く侘き事无限一此は二月の晦の事也ければ然はれ此くて止なむ心
盡しに無益也と思ひ取て其の後音も不爲て過けるに五月の廿日餘の
程に成て雨隙元く降て極く暗りける夜平中然りとも今夜行たらむ
には極き鬼の心持たる者也とも哀れと思ふなむと思て夜深更て
雨不^ニ音止と降て目指とも不知す暗れに内より破无くして本院に行
て肩^局に前^タ云繼女の童を呼て思ひ侘て此なむ參たると云せたりけれ
も童即ち返來云只今は御前に人々も未不寢ねは否不下今暫待給へ忍
て自ら聞^{エンカ}と云出たれば平中此れを聞くに胸騒て然はれこそ此る夜

來たらむ人を哀れと思さらむや賢く來にけりと思て暗き戸の迫に
楯^楯副て待立てる程多く年を過す心地なるへし一時許有て皆人寢たる
音爲る程内より人の音て來て遣戸の懸金を竊に放平中喜さに寄
て遣戸を引けは安らに開ぬ夢の様と思て此は何に事とつる事とこ
思ふ喜れも身篩ふ物也けり然れとも思ひ静め和ら内へ入れは虚
薫の香局^局に滿たり平中歩ひ寄て臥所を思ひ^シき所を搜れは女なる衣一
重を着て聳臥たり頭様肩つゝを搔搜れは頭様細やかにて髪を搜は凍
を延へたる様に氷やかにて當る平中喜さに物も不思ねは被篩る云出
てむ事も不思えぬに女の云ふ様極に物忘れとこそしてけ此隔の御障
子の懸金を不懸て來にける行て彼れ懸て來むと云へは平中現と思
て然は疾く御ませと云へは女起て上に着たる衣をは脱置て單衣袴許

を着て行ぬ其の後平中装束を解て待臥たるは障子の懸金懸る音は聞えつるに今は來むと思ふに足音の奥様は聞えて來る音も不爲て良久く成ぬれば恠さに起て其の障子の許は行て搜れば障子の懸金は有り引けは彼方より懸て入にける也けり然れそ平中云はむ方无く妬く思て立踊り泣ぬへ物も不思えて障子に副立てるに何よと无く涙泛る事雨に不劣す此許入れて謀る事は奇異しく妬き事也此く知たらまはは副て行てこそ懸さすへかりけれ我の心を見むと思ふ此は一つる也けり何に白墓无き者と思ふすちむと思ふに不會ぬよりも妬く悔しき事云はむ方無し然れば夜明くとも此て局に臥たらむ然有けりとも人知れぬと強に思へとも夜明方に成ぬれば皆人驚く音すれば不隠れて出てゝも何よそや思えて不明ぬ前に急き出ぬ然て其の後よりは

何て此の人の心疎からむ事を聞て思ひ疎みなはやと思へとも露然様の事も不聞えぬは艶す思ひ焦れて過ぬ程に思ふ様此の人此く微妙く可咲くとも宮は爲入らむ物は我等と同様にこそ有らめ其れを搔涼などして見ては思ひ被疎なむと思ひ得ての宮洗ひに行ひを伺宮を奪取て見てゝ何なと思て然る氣无しにて局の邊に伺ふ程に年十七八許の姿様體可咲くて髪は柏長二三寸許不足ぬ瞿麥重の薄物の柏濃さ袴四度解无氣に引き上上て香深の薄物に宮を裏て赤色紙に繪書たる扇を差隠して局より出て行くを極く喜と思ふて見繼々々行つゝ人も不見ぬ所よて走り寄て宮を奪つ女の童泣々く惜めとも惜無く引奪て走り去て人も无き屋の内に入て内差つれそ女の童は外に立て泣立てり平中其の宮を見れば琴染を塗たり裏宮は體を見るに開けむ事も糸

々惜く思えて内は不知す先つ真宮の體の人のにも不似ねは開て見跡
まむ事も糸惜くて暫不開て守居たれとも然りとて有らむやとは思て
熟々つ宮の蓋を開たれは丁子の香極く早う聞ゆ心も不得す恠く思て
「宮の内を臨けは薄香の色したる水半許入たり亦大指の大き許なる
物の黄黒はみたるか長二三寸許にて三切許打丸ゆれて入たり思ふに
然にこそは有らめと思て見るゝ香の艶に馥しければ木の端の有るを
取て中を突差して鼻に宛て聞けは艶す馥しき黒方の香にて有惣へて
心も不及す此れは世の人には非ぬ者也けりと思て此れを見るゝ付て
も何ゆて此の人に馴睦ひむと思ふ心狂ふ様に付ぬ宮を引寄せて少
引飲るに丁子の香に染返たり亦此の木に差て取上たる物と崎と少
嘗つれば苦くして甘し馥しき事無限し平中心疾き者にて此れと心得

る様尿とて入れたる物は丁子を煮て其の汁を入れたる也けり今一つ
の物は野老合せ薫を蒸にひちくりて大きな筆欄に入れて其よを出
させたる也けり此れを思ふに此は誰も爲る者は有なむ但し此れと涼
して見む物と云ふ心は付て仕はな然れは様々に極たりける者の
心はせかな此世の人には非さりけり何て此の人に不會ては止なむと
思ひ迷ける程に平中病付にけり然て惱ける程に死しけり極て益无き
事也男も女も何かに罪深かりけむ然れは女には強し心と不染ましき
也とそ世の人誇けるとなむ語たり傳へたるとや

會平定文女出家語第二

今昔平の定文と云ふ人有けり字を平中と云けり極たる色好みにて
色好みける盛に平中□□に行にけり中比□□に出てのみなむ色好み

ける其の時に後の宮の女房達其の日□□に出たりけるに平中此れを
見て色好と懸りて假借しけるに返て後に平中消息を遣たりけれハ女
房達車也ハ人の數有しを誰カ御許に有る消息にカと云せたりけれハ
平中此なむ書て遣たりけるも、わきのたもとの如すハみしかともな
ゆにをひ□□此れハ武藏の守□の□と云ふ人の娘にてなむ有ける
其の人なむ色濃き練を着たる其れを假借する也けり然れハ其の武藏
なむこの返事ハして云ひ通しける此の武藏ハ形有様微妙き若人^ニてな
む有ける可然き人々數假借しけれとも思ひ上りて男不爲てそ有ける
然れとも此の平中此く強に假借しけれハ女心に思ひ弱りて遂に忍て
會にけり其の朝平中返けるき^ト文をも不遣さりけれハ女心苦しく思
て人不知れす夕さりまで待けれとも不來さりけれハ女其の夜疎しと

思ひ明しけるに亦乃日も文も不遣す亦其の夜も不來す成しけれハ其
の朝仕ふ者共など糸泛々しく御すと聞渡る人々□く會奉らせ給て自
こそ御暇も障り給はめ御文をたに奉り不給ぬ事と云へハ女我ハ心よ
も思ける事を人^無を此く云へハ心疎く耻^ハしと思て泣けり其の夜も若
ゆと思て待けれとも不來さりけり亦の日も人も不遣す此て五六日に
成ぬ然れハ女泣にのど泣て物も不食さりけり仕ふ者共も思ひ歎て此
て人に不被知て止給て然りとて可有き事にも非ず異有様をも爲せ給
へゆしなど云ける程に女人にも不知せて髪を搔切る尾に成にけり仕
ふ者共など此れを見て集て泣迷けれとも更に甲斐无し糸心疎き身な
れと死なむと思ふも否不被死ねハ此く成て行ひをもせむ糸此な云く
不睡そとなむ主の尾云ける此て平中久く不音信さりけるハ様は彼^本

の會ての朝返けるまに文を遣せむとしける程は亭子の院の殿上人に
て常召仕はせ給ければ院より急き参れを召有ければ萬を弃て急に参
たりひるにやめて御共に大井に將御ましければ其に五六日と准け
る程に彼の所に何に惟しと思ふらむと心苦しく思けるとも今日返ら
せ給ふ今日返らせ給ふと云ける程に今々と思ふ様にて此く五六日に
も成しければ辛くして返らせ給ふまゝは彼の所に疾く行て有つる
有様も云開なむと思ふ程に人來て此の御文奉らむと云を臨て見れば
彼の人の乳母子此れを見るは胸□て此方へと云て先つ文を取入れて
見れば糸腹しき紙に切たる髪を搔蟠て裏たり糸帷と思て文を見れば
此く書たりあまのかはよなるものときゝゝとわめぬまへのな
みたなりけむと平中此れを見るに目も暗れて心肝を迷此の便に問ふ

に早う御髪下させ給ひてき然れば女房達も極くなむ泣き嗟り侍る己
り心にも然許也御髪をど見侍れば糸胸痛くなむと便も泣けは平中
も此れを聞見るに涙落て不開敢す然りとて可有き事に非ねは泣々く
返事此なむ世をわふるなみたなめてはやくともあまのめはやはな
めるへめらむと糸奇異くて更に物も不思議す自ら只今参てとなむ云
たりける其の後即ち平中行たりければ尼は塗籠に閉籠をて何めにも
云ふ事无めりければ平中仕ふ女房共に會てを泣く此る障りの有る
ども知せ不給て奇異めりける御心など云て返にける此れも男の志
の无きに至す所也何なる事有とも此る事有てと云遣らむは安める
へき事なるに然も不云すして五六日を経れば女の心に疎しと思はむ
理也めし但し女の前の世の報の有ければ此れに依て此く出家したる

にこそと有らむとなむ語り傳へたるとや

近江守娘通淨藏大德語第三

今昔近江の守の□を云人有けり家豊にして子共數有ける中に一人の娘有けり年未た若くして形ち美麗に髪長く有様微妙なりければ父母此を悲ひ愛して片時目を放つ事も无くて養ける程に止事无き御子上達部など數夜這けれども父守有て啼く天皇に奉らむと思て智取も不爲て傳けるに此娘物の氣に煩る日來に成にければ父母此を歎き繚て傍に付て祈禱共を爲せけれども其の驗も无かりければ思ひ繚けるに其時淨藏大德と云止事无き驗し有る僧有けり實に驗德新たなる事佛の如く也ければ世舉て此れを貴ふ事無限然れば近江守此の淨藏を以て娘の病を加持せさせむと思て構る呼ければ淨藏行にけり守喜て

娘乃病と加持せさせける程に即ち物の氣顯はれて病止にけれども暫は此て御まして祈らせ給へと父母強に云ければ淨藏云ふに隨て暫く有ける程に自然ら鬚に此の娘と淨藏見てけるに忽に愛欲の心發して更し他の事思ひさりけり亦娘も其の氣色を心得たりけるにや然て日來を經る程は何なる隙に有けむ遂に會にけり其れ後此の事隠すとれれども自然ら人粗知よければ世にも聞ゆにけり然れど世の人此の事を云繚けるを淨藏聞て耻て其の家にも不行に成にけり我れ此る名を取り今は世にも不有と云て跡を暗くして失にけり悔りけりけるにや有けむ其の後鞍馬山と云ふ所に深く籠居て艶す行ひけるに前生の機縁や深かりけむ常に彼の病者の有様の思ひ被出て心に懸り戀しく思えければ行ひの空も无くてのみ有ける程に打臥したりけるり起

上て見ければ傍に文有り弟子の法師の大副有けるに此は何その文を
と問ひければ不知ぬ由を答ければ淨藏文を取て披て見るに此の我り
忍ふ人の手にて有り奇異と思て讀めは此く書たりすみそめのくらま
の山にいる人はたどるくもわへりさなむと有り淨藏此を見るに
糸恠く此れを誰を以て遣せたるなるらむ可持來き使も不思す奇異さ
事うなと思て今は此事止つて偏に行ひをせむと思けれども尙愛欲の
思ひに不勝すして其の夜忍て京に出て彼の病者の家に行て搆て然々
と云入させたりければ娘竊に呼入て會にけり然て亦夜の内に鞍馬に
返り行にけり其れに淨藏尙戀しかりければ女の許に此なむ忍て云遣
たりけるわらくしてをもひ禾するくひしさをうたてなきつるうく
ひすのこえと其の返事よ女とてもきみわすれけをわくすくひすのな

くどりのみやをもひいつへきとなむ有ければ亦淨藏わためにつら
き人をいをきなわらなにのつみなきみをうらむらむと云遣たりけ
る此様に云通す事度々に成にければ此の事皆世に聞えにけり然れに
此の娘をい近江守无限く傳て御子上達部の夜這けるをも不聞き人す
いて女御に奉らむと思けれども此く聞にければ祖も不知して遂に不
見す成にけり此れに女の心の極て懣き也淨藏心を盡して云ふとも女
の不用さらむい不可叶す然れに心柄女の身を徒に成つる也と世
人云繚けるとなむ語り傳へたるとや

中務太輔娘成近江郡司婢語第四

今昔中務の太輔の□と云ふ人有けり男子は无くて娘只獨のみを有
ける家貧かりければ兵衛の佐の□と云ける人ぞ其娘よ會せて智

として年來を経けるに此彼構て有せけるも智も難去く思て有ける程
は中務の太輔失にけは母堂一人して萬を心細く思けるに其れも指
次煩て日來に成にければ娘系哀れに悲く歎ける程に母堂も失にけれ
は娘獨を殘居て泣悲ひけれとも甲斐无し漸く家の内に人も无く出畢
にければ娘夫の兵衛の佐に祖の御せし限は此彼構て有せ聞えしを此
く便无く成にたれば其の御縁なども不叶官仕は何ても見苦くても御
せむ只何にても吉からむ様に成り給へと云ければ男系惜くて何か
見奔むするそとなん云て尙棲けれとも着物なども見苦く只成りに成
り持行けは妻外也とも系惜と思給はむ時は音信給へ何にても此ては
官仕へは給はむ見苦き事也と強に勸ければ男遂に去にけり然れば
妻獨りにて彌よ哀れし心細き事无限し家も澄て人も無かりければ只

幼き童一人あむ有けるも衣著る事も无く物食ふ事も難くて破无りり
ければ其れも出で直にけり男も然こそ系惜と云けれども人の智に成
にければ音信をたし不爲さりければ出て其れも云はむや來る事は絶
にけり然れも様惡く壞たる寢殿の片角は幽にてを獨り居たりける其
の寢殿の片端は年老たる尼の宿て住けるに此れ人を哀れかりて時々
菓子食物など見けるをは持來つゝ志ければ其れに懸りて年月を経け
る程に此尼の許に近江國より長宿直と云ふ事に當て郡司の子なる若
き男の上りたをけるか宿て此の尼に徒然ある女の童部求めて得させ
よと云ければ尼我れは年老て行も不爲ねと女の童部の有らむ方も不
知を然て此の殿よこそ系嚴氣に御する姫君は只獨り難有氣にて御ぬ
れと云ければ男耳を留めて聞て其れ已に會せ給へ然て心細くて過し

給はむよりは實に嚴くは國に將下て妻にせむと云ければ尼今此の由
を云はむと受けり男此く云始めてより後は切に實め云ければ尼
彼の人の許に菓子など持行たりける次てに常には何かて此ては御
ませむと爲るなど云て後に此に近江より可然き人の子の上たる可然
て御ますよりも國に將下り奉らむと切々に申し候ふを然様にもせさ
せ御ませかし此く徒然に御ますよりはと云ければ女何ゆて然る事
はせむなど云ければ尼返ぬ此の男此の事を切に思て弓など持て其の
夜其の邊を行ければ狗吠て女物怖しく常よりも思えて侘しく思ひて
居たりける程に夜明て尼亦行たるに其の人云く今夜こそ物怖しく破
无りりつれと尼然ればこそ申し候へ然申す者に打具して御ませとは
侘しき事のみこそ御ませむすれと云成しければ女實に何ゆせまると

思たる氣色を尼見て其の夜忍て此の男を入れてけり其の後男馴睦ひ
て不見習して心に難去く思て近江へ將下ければ女も今は何ゆはせむ
と思て具して下にけり其れに此の男本よを國に妻を持ちたりければ祖
の家に住けるに其の本の妻極く妬み喰ひければ男此の京の人の許には
寄も不付す成にけり然れば京の人祖の郡司に被仕て有ける程に其の
國に新しく守成て下給ふとも國舉て騒ぎ合たる事无限に而る間既に守
の殿御まいたりとて此の郡司の家にも騒ぎ合て菓子食物など器量く
調へ立て館へ運ひけるに此の京の人をよ京の□と付る郡司年來仕け
るに館へ物共運けるに男女の多く入れり此の京の物を持せて館
へ遣けり而る間守館にて多の男女の下衆共の物を持運ふを見ける中
に異下衆にも不似す哀れに故有て此の京の可ニ敷レ敷見けむ守小舎人童を

召て忍て彼の女は何なる者を尋る夕さり参らせよと云けれハ小舎人
童尋ぬるに然々の郡司の従者也聞て郡司に此なむ守の殿御覽して被
仰ると云けれハ郡司驚て家に返て京の湯浴一髪洗せと返々す傳立
て郡司妻に此れ見よ京の爲立たる様の美さうと云ける然て其の
夜衣など着せて奉てけり早う此の守カ此の京の力本の夫の兵衛の佐
にて有し人の成たりける也けり然れハ此の京のを近く召寄せて見け
るハ恠く見し様に思ひけハ抱ハ臥たりけるに極て睦まじりけれ
ハ己ハ何なる者を恠く見し様に思ゆるとよと云けれハ女然も否心
不得さりけれハこれハ此の國の人にも非ず京なむ有しなむ許云けれ
ハ守京の者の來て郡司に被仕けるにこそと有らめなど打思て有りけ
る女ハ娥く思えけれハ夜ハ召けるハ尚恠く物哀れに見し様に思えけ

れハ守女に然ても京に何也一者を可然きにや哀れに糸惜と思へハ
云ふを不隱さて云へと云けれハ女否不隱さて實に然々有し者也若一
舊き男にて有し人の故などにてても御ますらむと思ふれハ日來ハ不
申さりつるに此く強に問へせ給へハ申す也と有のまに語て泣けれ
ハ守然れハこを恠く思つる者を我り舊き妻にこそ有けれと思ふに奇
異くて涙の泣ハ然る氣无しに持成して有る程に江の浪の音聞ひけれ
ハ女此れを聞て此ハ何ハ音ハとよ怖しやと云けれハ守此なむ云ける
これそこのつひにあふみをいとひつゝ世にふれともいけるハひ
なしとて我れハ實然にハ非すやと云て泣けれハ女然ハ此ハ我ハ本の
夫也けりと思けるに心ハ否や不堪さりけむ物も不云ハして只氷ハ水
疼けれハ守此ハ何にと云て騒ける程に女失にけり此れを思ふに糸哀

れなる事也女然にこそと思けるに身の宿世思ひ被遣て耻ぢさ無きに否
不堪て死にけるにこそ男の心の無りける也其の事を不顯無きされし
て只可養育りける事をこそ思ゆる此の事女死て後の有様の不知す
となむ語を傳へたる也

身貧男去妻成攝津守妻語第五

今昔京に極て身貧き生者有けり相知たる人も無く父母類親もなくて
行宿る所も无りけれ人の許に寄て被仕けれとも其れも聊なる思
も無かりけれ若し宜き所にも有ると所々に寄けれとも只同様のの
み有けれの宮仕へをも否不爲て可爲き様も無くて有けるは其の妻年
若くして形ち有様宜くて心風流也けれ此貧き夫に隨て有ける程に
夫萬に思ひ煩て女に語ひける様世に有らむ限の此て諸共にこそ思

つるに日に制て貧さのみ増るの若し共に有る悪無きと各て試む
と思ふを何にと云けれの妻我れの更に然も不思ひす只前の世の報な
れの互に餓死なむことを可期と思つれとも其に此く云ふ甲斐无く
のみ有れの實に共に有る悪無きと別れても試よと云けれの男
現にと思て互に云契て泣々く別れにけり其の後妻の年も若く形ち有
様も宜りけれの□□の□□と云ける人の許に寄て被仕ける程に女
の心極て風流也けれの哀れに思で仕ける程に其の人の妻失にけれの
此の女を親く呼び仕ける程に傍に臥せなとる思不懣無きからす思はけ
れの然様にて過ける程に後編に此れ女を妻として有けれの萬を住
せてのみを過ける而る間攝津の守成にけり女彌二微妙き有様にて年
來過けるに本の夫の妻を離レて試むと思けるに其の後彌二身弊く

のみ成り増て遂に京にも否不居て攝津の國の邊に迷ひ行て偏に田夫に成て人に被仕けれとも□□□に下衆の爲る田作り畠作り木など伐など様事をも不習して心地なれい否不爲て有けるに仕ける者此の男を難波の浦に葦を対に遣たりけれい行て葦を対けるに彼の攝津の守其の妻を具して攝津の國に下けるは難波邊に車を留めて逍遙せさせ多く郎等眷屬と共に物食ひ酒吞あとして遊び戯けるは其の守の北の方の車にして女房などいも難波の浦の可咲く謎事など見興るは其の浦に葦対る下衆とも多りけり其の中に下衆なれとも故有て哀れに見ゆる男一人有り守の北の方此れを見る吉く護れい惟く我か昔の夫に似たる者かと思ふに僻目り□思て強に見れい正しく其れ也と見る奇異き姿よて葦を対立てるを尙心疎くても有ける者か

何なる前れ世の報にて此るらむと思よも涙泛れ共然る氣无くて人呼て彼の葦対る下衆の中に然々有る男召せと云けれい便走り行て彼男御車召すと云けれい男思ひも不懸ねい奇異くて仰立てるを便疾く参れと音を高くして恐せい葦を対り弃て鐵を腰に着いて車の前に参たり北の方近くて吉く見れい現は其れ世上に穢て夕黒なる袖も无き麻布の帷の膺本なるを着たり帽子の様なる烏帽子を被て顔も手足も土付て穢氣なる事無限に膺脛に経と云ふ物食付て胄也北の方此と見るは心疎く思えて人を以て物食せ酒など吞すれい車に指向て糸吉く食居る顔糸心疎然て車は有る女房は彼葦対る下衆共の中は此り故有て哀れ氣に見えつるに糸惜けれい也とて衣を一ツ車の内より此れ彼の男に給とて取するに紙の端に此く書て衣は具して給ふ

拾遺雜下

コソダ

あしからしきをもひてよりいわけれし
などいかにいのうらにしもすむ

と男衣を給ひりて思ひ不懸ぬ事なれい奇異と思て見れい紙の端に被
書たる物の有り此を取て見るに此く被書たれい男早う此い我の昔の
妻也けりと思に我の宿世系悲く耻しと思えて御硯を給ひらむと云
けれい硯を給ひたれい此く書てなむ奉たりける

同上

さみなくてあしかりけりともふにい

いといなにいのうらそすとうき

と北の方此れを見て彌よ哀に悲く思けり然て男の葦不對すして走り
隠れにけり其の後北の方此の事を此彼人に語る事無くて止にけり然
れい皆前の世の報にて有る事を不知して愚に身を恨る也此れい其の

北の方年など老て後に語けるにや其れと聞繼て世の末まで此く語り
傳へるをとや

大和國人得人娘語第六

今昔□□の守

□□の

□□と

云ふ人

有けり

此の

人

有けり

此の

人

家高き

以下六字衍敷

君達にて有けれとも何なる事にてい有けむ受領にて有けれい家豊に
して萬つ町ひてなむ有ける其の妻懷妊したりけるに亦可然き所に有
ける官仕人也ける女房を難去く思て年來有けるに其も一度に懷妊し
けり而る間共に女子を産たりけり其れに其の思ひ歎き悲ひけれとも
甲斐无て實の妻に此乃事を語けれい妻も哀りて然ら其の産した
らむ女子をい此に迎へて養ひ給へい此れ姫君の御共にせむなど事
吉く云けれい守喜と思て乳母許を具して其の女子を迎へ取てけり然

て障子を隔て彼方此方に二人の女子を置いてそ養ける繼母の心の風流
なりけれハ此の繼子を憾しとも不_ト思て我の_ト子にも不劣_トす思て過ける
に此の向腹の乳母心や惡_トりけむ此の繼子を憎ま_トく不安_トす排_ト思て
何て此の子を_{失ハント歟}□□心の内に思ける程に大和乃國に住ける女の事の縁
有て此の向腹の乳母の許に常に來たりけるに此の繼子をハ此れに取
せてこそ失_ニなふへたりけれ_カと思て夜る此の繼子の乳母の吉く寢入た
りける間に隙を量て其の兒を抱き取てけり然て其の大和より來たる
女に取せて云く此の子を得て何ならむ所にも落_トち棄て狗に食せてよ
不安_トす思ふ事の有れハ也努々心より外にハ人不可散_ソす汝を年來見つ
るに二ッ无く憑たれハ我れも此の許の竊事を云ふにて萬ハ可知_クと
私語て取せつれハ女兒を搔抱て出て夜るを晝にて大和へ行ける_ト途

に馬に乗て從者共數具したる女會たり此れハ其の國の城下の郡と云
ふ所に住ける藤大夫と云ける者の勢德器量くて過ける_ト何にも子の
无_トりけれハ此の事を歎て年來常に長谷に參て子_無を給_ヘと願ひ申ける
に其の藤太夫の妻の其の時に長谷に參て逐_還向_トける也けり此乳母の
教へつる様に此の兒を弃てむと思けるに兒の糸嚴氣也けれハ難_ト弃て
行くに此の藤太夫が妻行會て見れハ下衆女の兒を搔抱れたれハ思ふ
に己の_メ子にこそハ有らむと思て行過る程見れハ賤の衣の中より百日
許に成たる女子乃糸嚴_氣なれハ子にハ非ぬ_トハやと疑て其の兒ハ其の子
ハ糸嚴氣なる兒かなと子糸_欲餘_トに人を以問ハすれハ女の云く此れハ
己の_メ子よも非_ト止事无_トき人の御子を産_ト給て即ち其の母堂の失せ給
ひたれハ要せむ人にも取せよとて人の給たれハ然様に要せむ人とも

尋てこそとて思て罷る也と云へ此の五位の妻心の内は喜しと思て
云ひする様我れなむ子无くて年來長谷に詣てつゝ其の事を祈り申つ
るは可然きにて此く會たり其の兒速に我に得させてよと云は女も喜
て兒を取せつれい兒を抱き取て云く尙々此の兒は何なる人の御子と
同の慥に聞たりむこそ未^末も喜くらめ只竊に云へ我れ此の兒の爲の事
なれい其人の御子と聞たれとも更一人に不可散すと云て上に着たる
衣を一つ脱て喜れまゝに取すれい女思ひ懸ぬ衣を得て喜めけるま
ゝに下衆の云ふ甲斐无き事の乳母の教へ事をも不信すて努々散さ
せ不給ましくい申し侍なむ若し聞ゆるやせむすらむと思へい也と云へ
い萬に誓言を立て不可散ぬ由を云ふ其の時に女實に然々の人の御
子也と云へい此れを聞くに下衆にい不有^{不有}とけりと思ふに彌喜くて偏

に觀音の御助と思ひ成して若し取返をも爲ると思けれい逃る様に別
れ去りけり然て兒を家に將行て夫妻共に心を盡^テなむ養ける然て彼
の祖の家には兒を失ひて奇異なりて騒ぎ合て求め嗚けれとも遂に不
聞ゆすして甲斐无くして止にけり然れば彌よ此の向腹の姫君を傳て
亦无き者にしける程に十五六歳にも成ければ右近少將□□の□□と
云ける人の年若く形ち美麗に心へ可咲^ハなりけるを聲に取て傳續ける
事無限に姫君も形ち有様微妙なりけは互に相思て行時立離る事も
无く見ける程に姫君甚無く病付て日來煩て態と心地大事に成にけれ
は祈り様々にして父母歎けれとも遂に失にければ戀悲ひけむ事只思
ひ可遣い其の後少將此の人を戀悲て世にも不經いと思て妻ども不儲
すて心を澄して官仕へも心殊に不爲て只有一人に似たらむ人を見

てしらなと願ひ思けるは彼大和の人は年月を経るまゝに艶す傳き養ひけり形ち有様は失にし向腹の姫君には勝れてなむ有ける其れり七條邊まで産れたりけれち産神に御すとて二月の初午の日稻荷へ参らむとて大和より京へ上て其の日歩まで稻荷に詣てたりけるに彼の少將心も嘆めむと思て其の日稻荷に詣て還向けるに此の大和の人に會にけり少將此を見れば姿有様勞た氣にて着物□□なる女會たり吉見れば年十七八の程也氣高く淨氣にて嚴き事无限と何心も無く打仰たると笠の下より見れば恠く有し昔人に少し似たる者柄此れは愛敬付き淨氣なる事増たり然れと少將目も暗れ心も騒て小舎人童を呼て此の人の入らむ所慥に見て來とて遣たれば童後に立て行くを共なる者共氣色はみて已れば誰を恠く具し参らせたる様なるはと云へは童打

睨て彼をここに御まゝつる少將殿の入らせ給はむ所慥に見て参れとなむと云へはともなる人の云く御まさむ所は可見くも所也只疊の裏と許を申せと云ければ童其の由を聞て返て少將に此なむ申つると云ければ少將更に心難得く歎き思ける程に女は行き別れにければ可尋さ方も无かりけるに少將の家無に止事无き學生の博士の來たりけるに物語の次ては少將疊の裏と云ふ事は何ぞ云ふ事と問ければ博士疊の裏とは大和に有る城下と云ふ所をこそ古へ舊事と申たれと云ければ少將此を聞て心の内に喜ひ思て然ては其に住む人なりと心得て上の空なれとも彼の人に心移り畢しけり然云らむ所へ行本マむはやと思ふ心深く付て使也一小舎人童と大和の邊知たをける侍一人舎人男一人許して馬に乗て忍て出立て大和へ行ける城下と云ふ所を尋て行た

れども何くとも不知す只大にやかなる家の有るは檜垣長や如に差廻
したる有り若し此にや有らむと思ひ煩て馬より下て門に立る程に小
舎人童彼の稻荷乃共也一女の童の家の内より書たるを見て
以下欠文

右近少將□□□行鎮西語第七

今昔右近の少將□□の□□と云ふ人有けり形ち有様美麗にて心を
へ可咲かりけり其の中に管絃をなむ極く好ける其の人九月の中の十
日許の程に月の糸認りける夜人の許行けるに□□を□□との邊に
極く荒たる家の木立いと譚き有けり其の内に髷に箒の音の聞ゆけれ
は少將此れを極く興いける人にて車より下て此は何なる人の住なら
むと心慄く思て門より入て中門の廊の脇に隠れて立て見れば西の對
の簾を少し卷上て放出を間に向て年廿許なる女の云はむ方无く可咲

氣なる前に箒を置いて彈居たる手つき月に□□ち糸微妙く可咲く見え
少將此れを見るに心移り畢て行く方の事は忌よけり女房の前に小き
童一人居たりけり人々も无りければ少將此る折もよも不有と思
て押て入にけり女可隠さ方も无りければ奇異く思けれども可辭さ
様无くて近付にけり少將女の氣はひ有様なと世に不似に微妙かりけ
れは類くひ無く哀れに糸惜く思けれども然て可有き事に非ねは曉に
成ぬるを女も夜明なむとて侘ければ少將无限云契て出にけり其の後
は輒く會事も无りければ少將此れを歎つゝ有ける程此の女は□□
の□□と云ける人の娘也けり其の母堂失ふければ父妻を儲て此の娘
を不知さりけり母堂の失たる家に獨り殘留て居たる也けり而る間父
太宰の大貳に成にければ鎮西に下けるに此の娘を年來は不知さりけ

れと云京に此ては何に^ナして^ナは有らむと爲ると云て具して下らむと爲るぞ少將此訖を聞て京に有つれはこそ會ふ事難歎ぞ一つも過つれ鎮西に祖に具して下らむには何より^ナて^ナは可見きと哀に心細く思けれども可止き様无ければ極く泣き歎けれども甲斐无くて女下にけり其の後は少將惣て世に可有くも更に不思さりければ後には病成て年月を経るに尙^ナ憊て難堪く可死^ナに^ナて思ければ然は今一度相ひ不見ては何て有らむと思て公に暇を申し父の大納言□□と云ける人にも白地に物に詣てむと云忍て竊に出立て鎮西へ下けるに隨身一人小舎人童一人馬舎人許にて只行着く所を泊にて此の者共に被養て行ける程日來を経て既に太宰府に下着て可尋き方无りければ構て京にて前に居たりし童を尋て呼出したるければ童穴極くや此は何に

て御しつるを^ナとて主の女に告たりければ主會て哀れと思たる氣色也少將尙世の中にも難有く思えて可死く成にたれば今一度對面せむと思てなむと云ければ女哀れに此くまで思給ける事と云て會たをければ少將やめて此も彼も不云て曉に馬に打乗て京へ返り上らむとしければ女何にして可^ナ行きと云けれども可遁くも无かりければ何に^ナりせむと思て行けるに十二月許の程と也ければ雪極く降て風の氣色難堪りければ只疾く行着なむと思て急て行けるに日の暮るまゝに雪の降積るも不知す行々て暗く成にければ行き宿る所も无くて只墓无く木れ本に^下居て此に何くと云ふと問ければ人有て此くの岸に^ナなむ申せと云ければ流々行く水を結ひて上て食物あむと構て女にも食はせ我等なども食てけり此様に道の過けるも此の共なる者共の

墓无き輕物などを持ちければ此彼して養けるに此も无下に人氣も遠くて故へ无く心細く思ひ次けられて遙々と見え渡けるも過こし方行末などの哀れなる事共を互に語をつゝ泣けり而る間少將隠れなる方に白地さまにとて行にけるも良久く不見ゆさりければ女何ゆに此く久くは不見えぬに思て共なる者共に告れば其等行て見ければ少將も无し女驚て小田深く行て見ければ垣の有傍に少將の狩衣の袖の限り懸りたり女此を見て穴極とたに更不云れず被迷て尙奥を見ければ其後の方に少將の履たをつる□□の片足のみ有り取上て見れば只足の平のみを有ける悲く極き事云へは愚にて女の前に此れを持行て臥し丸ひ泣迷ふ此れを見る女何許思ゆけむやめて其こに泣臥にけり然て二日許其に有ける程に女の祖の大貳此と聞て鎮西より數の人を

遣せて尋けるに亦少將の祖の大納言の許よりも少將鎮西へ行にけりと聞て人を遣けるに共に此乃木の本に尋ね來り會にけり此と見て使喜ひ乍ら何を少將殿はと問けれとも可答さ方无し舉くして然々と云ければ使奇異く泣迷へとも更に甲斐无し鎮西の使は今甲斐无と云て女を去來給へとて鎮西へ將行ゆむと爲れとも泣迷て低臥して起も不上ねは使

以下大

大納言娘被取内舍人語第八

今昔□□天皇の御代に大納言の□□の□□と云ふ人有けり子共數有ける中に形ち美麗有様微妙き女子一人有けり父の大納言此を愛し悲て片時傍を不放すして養ひ傳て天皇に奉らむとしけるに其の家に侍にて被仕ける内舍人□□の□□と云ふ者有けり事の縁有て其の家の

入立にて近く被仕ける程に自然ら鬚に此の姫君を見てけり形ち有様
氣はひの世に不似す嚴わりけるを見て此の男忽に愛欲の心深く發て
思ひ可寄くも非ぬ事なれども其の後は萬の事不思すして夜る晝只此
の姫君の有様のみに懸りて見ま欲く難堪く思へける程に畢ハテ敷には病
に成て物なども敢て不食をすして可死き程に成にけれと返々す思ひ
續て其の姫君の御方に有ける女に會て極たる大事にて殿に可申さ事
の候を姫御前に申さむと思給ふると其の事申給へと云ければ女何事
を申さむと云ければ男此の事を極たる密事にて人傳てには否不申ま
しき事にてなむ有るを己れ年來此の殿に仕て内外无き身也忝くも端
に立出させ給ひたらは不人傳て細かに申さむと□□む思給ふると云
ければ女其の由を聞て姫君に此くなむ申すと忍ひやかに語ければ姫

君何事にか有らむ實に其の男は親く被仕る者なれば可憐きにも非ず
自ら聞かむと□□云ければ女此の由を告れば□□喜き物から心驕さ
て心に思ける様は今生て世に可有くも不思えさりければ同死にを
此の姫君を取て本意を遂て後に身をも投て死なむと思ひ得て此も云
也けり然は男世に有らむ事残り少く思はて萬は心細く哀れに思えけ
れども此の心難思止くて彼の女に會て彼の事何かに尙急き可申れ事
よてなむ有ると責ければ女此の由を姫君に申しければ姫君何心も元
く端に出て妻戸の有る簾の内に立て聞むと爲る夜なれば人も无し男
延の際に近く寄て打出し可申さ事も无ければ暫く居たるに奇異き態
をもしてむするや今は我が身は限也けりと思ひ煩ひけれども只此
の思ひの焦焼く如くに思えければ然はれ死なむと思て立走て簾の

内に飛入て姫君を擁抱て飛ふ如くにして其の家を出て遙に去て人も無かりける所に將行よける其の家には姫君失給ひにたり嗚合て大納言より始て一家の上中下の人騒迷ける事无限然れども可尋れ方无ければ甲斐无くて止にけり其れに此の内舍人其の夜より跡を暗くして不見えさりければ此の内舍人の取つると思て止事无き人なとに被語もしたる事にいと疑ひ合へり亦彼の申繼ける女も現に内舍人り抱て逃にいと見いと恐て然も否不云て然に疑てを止にけり然て彼の内舍人は此の事聞なと我の身も徒に成なむと思ければ京も否不有し只遙なりむ方に行て野れ中にも山の中にも此の姫君を具して有らむと思ひ得て此の姫君を馬に乗せて我れも馬に乗て調度播負て陸奥國の方へ行けるに只親く仕ける從者二人り付て行け

る夜る晝とも无く行て陸奥國の安積の郡安積と云ふ山の中に行着て此は□□にて人不來しと思て此の所に木を伐て庵を造て此姫君を居へて内舍人は此の從者共を具して里に出つゝ食を求てを食せける然て年月を経けるに夫里に出たる程は女は只獨りを居たりける而る間女懷妊しにけり男食を求むる爲に里に出にけるに四五日不來さりければ女待侘て心細く思えけるまゝに庵を立出て見行けるに山の北に穴井の有けるを見て我が影の水に移たりけるを見けるに鏡見る世も无かりければ顔の成にける様も不知て水に移たるを見れば糸怖し氣也けるを極て耻ぢしと思て此なむ獨言に云けるあさり山にけさへみゆる山の井のあさくは人ををもふものかと云て此れを木に書付て庵に返り行て我が家に有し時父母より始めて萬の人に被傳て微妙り

りし事共を思ひ出して心細き事无限を何なる前此世の報にて此ら
むと思けるに否や不堪さりけむやめて思ひ死し死しけり其の後男食
物なと求て從者に持せて時來て見ければ死て臥せりければ糸哀れに
奇思と思けるに山の井木に被書付たりける歌を見て彌よ戀ひ悲む
て奄に還て死た妻の傍に副ひ臥して思ひ死に死にけり此の事を從者
の語り傳たるよや世の舊事になむ云ぬる然れば女は從者也とも男に
は心不許まじれ也となん語り傳へたるとや

信濃國姨母捨山語第九

今昔信濃の國更科と云ふ所に住む者有けり年老たりける姨母と家に
居へて祖の如くして養て年來相副て過しけるに其の心に此の姨母を
糸厭はしく思えて此れり姑如よて老屈りて居あるを極て慥く思けれ

は常に夫に此の姨母の心の□□く惡き由を云聞せければ夫六借き事
かなと云て此の姨母の爲に心に非て愚なる事共多く成り持行けるよ
此の姨母糸痛く老て腰は二重にて居たり婦は彌よ此れを厭て今まで
此れ不死ぬ事よと思て夫に此の姨母の心の極て慥きに深き山に將
行て弃てよと云けれども夫糸惜かりて不棄さりけるを妻強に責云け
れば夫被責れ侘て弃てむと思ふ心付て八月十五夜の月の糸明かりけ
る夜姨母に去來給へ姫共寺に極て貴き事爲る見せ奉らむと云ければ
姨母糸吉き事かな詣てむと云ければ男搔負て高き山の麓に住ければ
其の山に遙々と峯に登り立て姨母下り可得くも非ぬ程に成て打居へ
て男逃て返ぬ姨母をいゝと叫て男答へも不爲て逃て家に返ぬ然て
家にて思ふ妻に被責て此く山よ弃てつれとも年來祖の如く養ひて相

副て有つるに此れを弄つるゝ糸悲く思えける。此の山の上より月の糸明く差出たりければ終夜不被寝す戀く悲く思て獨言に此くなむ三けるわめこゝろなくさめわねてさらしなやはすてやまにてるつきとみてと云て亦其の山の峯に行て姨母を迎て將來たをける然て本の如くを養ける然れば今の妻の云はむ事に付て由无き心を不可發す今も然る事は有ぬへ。然て其の山をは其よりなむ姨母捨山と云ける難噯しと云ふ譬には舊事に此れを云ふに其の前には冠山と云ける冠の巾子に似たりけると語り傳へたるとや

住下野國去妻後返棲語第十

今昔下野の國□□の郡に住む者有けり年來夫妻相共に棲渡ける程。何なる事か有けむ夫其妻を去て異妻を儲てければ夫心替り畢て其の

本の妻の許に有ける物共を何にも彼も不殘さす今妻の許へ計へ運ひ持行けるを本の妻系心疎しと思けれども只男の爲るに任て見けるに塵許の物も不殘さす皆持行畢ぬ只纔に殘たる物は馬船一つの有ける其れを此の夫の從者よて馬飼よて仕ける童有けり名をは眞梶丸を云ける其れを使にて取に遣せたりければ本の妻此の童を見て云ける様今は世に不來しと童云く何てり不參候さらむ心淺くも被仰るかなとて馬船持行むと爲るに本の妻已に主に申さむと思ふ事の有るをは申てむやと云ければ童系吉く申し候ひなむと云ければ本の妻文を奉らむをは更し世も不見給はし只事に此く申せとてふねもこしまりちもこいあけふよりはうき世のなかをいかてわたらむ

と童此と聞て返り行て主は此なむ被仰つるも早此を聞て哀れ也とや
思ひけむ運ひ取たりける物共を皆運ひ返して本れ妻の許は返行き本
の如白地目も不爲て棲ける然れは情有る心有る者此なむ有けるをな
む語り傳へたるを

品不賤人去妻後返棲語第十一

今昔誰とは不云す品不賤ぬ君達受領の年若き有けり心に情有て故々
しくなむ有ける其の人年來棲ける妻を去て今めりし人に見移にけ
り然れは本の所をは忘れ畢ぬ今の所は住ければ本の妻心疎しと思て
糸心細くて過ける男攝津の國に知る所有ければ遊はむ爲下ける
に難波邊を過ける程は濱邊の糸識きを見行けるに蛤の小やなるに
海松の房やよて生出たりけるを見付て此れ極く興有物也と思て取

て此れを我が難去く思ふ人の許は遣て見せて興せさせむと思て小舎
入童の然様の方に心得て仕けるを以て此れ慥に京に持行て彼に奉れ
此れ興有る物なれば見せ奉らむとてなむと申せと云て遣ければ童
此を持て行て思ひ違へて今の所へは不持行すして本の妻の家は持行
て此なむと云入たりければ本の妻糸思は不懸ぬ程は此く興有る物を
さへ遣せて此の我が上まで不失はて御覽せよと云遣せられは殿は何
に御ますと問すれば童攝津の國に御ますに候ふ其れに難波邊にて
此れは御覽に付たる物を奉らせ給ひたる也と云へは本の妻此く聞く
に恠く僻事に所違へし持來たるにや有らむと思へとも取り入れて然
承りぬと許云せられは童即ち走り返て攝津の國に行て主に慥に奉り
候ひぬと云へは主は今所に持行たるをと知て有けるに彼の本の所に

は此れと見るに實の興有る物なれど盥せんに水を入れて前に並て此れを
入れて興し見居たりけり而る間男十日許有て攝津の國より返り上て
今の妻に何一ゆ彼の奉り一物の侍りやと打咲て云ければ妻遣たりし
物やは有し其れは何物ぞと云ければ男否や小き蛤の可咲氣なるに海
松の房やゆに生出たりしを難波の濱邊にて見付て見しに興有る物也
一ゆは急き奉りしとはと云へは妻更なる物不見えす誰を以て遣せ給
ひしそ持來たらま一ゆは蛤は焼て食てまし海松は酢に入れて食まし
と云ふに男聞くに思ひに違て少一心月无き様也然て男外に出て遣せ
一童を呼て汝は有し物をは何に持行に一そと問へは童思ひ違へて本
の所は持行たる由を云へは主大きに喚て速に其れ取り返して只今來
と責れは童極き錯をもしてけるゆなと思ひ驚て本の所に走り行て此

の由を云入せたりければ本の人然れはこそ所違へ也けるにこそと思
て水に入れて見けるを急き取上て陸奥紙に裹て返し遣けるに其の紙
は此なむ書たりける

あまのつとをよはぬゆたにあをければ
みるゆいなくもゆへにうつるゆか

と童此れを持行て此く持參たる由を云ければ主外に出て此れを取て
見るに本様にて有れは糸喜く不失とすして有けると心慥く思て内に
持入て披て見れは裏紙に此く書たり男此れを見るに糸哀れに悲くま
今の妻の貝は焼て食てまし海松は酢に入れて食てましと云し事思ひ
被合て忽に心替て本の所に行なむと思ふ心付ければやりて其の蛤
を打具して行はけり定て其の今の妻の云し事本の妻に語りける然て

今の妻をは忘れて本の所になむ住ける情有ける人の心は此なむ有ける現は今の妻の云けむ事疎してむかし本の妻の情には必ず返り可棲き事也となむ語り傳へたるや

住丹波國者讀和歌語第十二

今昔丹波の國□□の郡に住む者あり田舎人なれども心に情有る者也けり其れゆ妻を二人持て家を並へてなむ住ける本の妻は其の國の人にてなむ有ける其れをを靜に思ひ今の妻は京より迎へたる者よてなむ有ける其れをは思ひ増たる様也ければ本の妻心疎しと思てを過ける而る間秋北方に山郷よて有ければ後の山の方より糸哀れ氣なる音にて鹿の鳴ければ男今の妻の家に居たりける時にて妻に此は何か聞給ふゆと云ければ今の妻煎物にて甘し焼物にて美き奴をゆしと云

ければ男心に違ひて京の者なれば此様の事をは興すらなところを思け

る少し心月無しと思て只本の妻の家に於て男此の鳴つる鹿の音は

聞給ひつゆと云ければ本の妻此なむ云けるわれも一かあきてそき

人新古

みにこひられいまこそをよそにのみきけと男此を聞て極しく

哀れと思て今の妻の云つる事思ひ被合て今の妻の志失にければ京に

送てけり然て本の妻となむ棲ける思は田舎人なれども男も女の心を

思ひ知て此なむ有ける亦女も心はへ可咲りければ此なむ和歌をも

讀けるとなむ語り傳へたるや

夫死女人後不嫁他夫語第十三

今昔□□の國□□の郡に住ける人祖有て娘は夫を合せたりけるに其の夫失にければ祖亦他の夫を合せむと爲るに娘此れを聞て母に云く

我れ男に具して可有き宿世有らまじは前の男こそ不死すして相具して有らまじ男に不具ましき報の有ればこそ彼れも死たため譬ひ夫を儲たりとも身の報ならば亦も死なむ然れば此の事可被止しと母此れを聞大さに驚て父に此の由を語ければ父の云く我れ年既に老ひたり事近きに有り汝ち其の後は何にしてう世には有らむと爲るとて尙合せむと爲る娘父母に云く然らば此の家に巢を作て子を産める驚有り雄鷲を相具せり其の雄鷲を取て殺して雌鷲に注しと付て放ち給へ然て明けむ年其の雌鷲他の雄鷲を具して來たらむ時に其れを見て我れに夫をは合せ給へ畜生そら夫を失ひつれば他の夫を儲くる事無し況や人は畜生よりも心可有しと父母現に然も有る事とて其の家に巢を昨て子を産たる鷲を取て雄鷲を殺して雌鷲には頸に赤き糸を付

て放つ然て明る年の春鷲を待つ其の雌鷲他の雄鷲に不具して頸に糸は付乍ら來れり巢を昨て子を産む事无くして飛ひ去ぬ父母此れを見て實に然る事也けりと云て娘に夫合せむの心无くて止にけり然て娘此なむ云ける

四そいろをあらはれとみらむつはめそら

ふたりは人にちきらぬものを

とを云ける此れと思ふに昔の女の心は此あむ有ける近來の女の心には不似さむけるにこそ驚めも亦他の雄无ければ子は不産ねとも家に來りけむこそ哀なれとなむ語り傳へたるとや

人妻化成弓後成鳥飛失語第十四

今昔□□の國□□の郡に住ける男有けり其の妻形ち美麗よして有様

微妙なりければ夫難去く思て棲ける程に妻夫寢たりける間、男の夢
を見る様此の我の愛と思ふ妻我れに云く我れ汝を相棲と云へや。我
れ忽に遙なる可行なむとす。汝を今は不可見す。但し我が形見をは留置
所二款
む。其れを我の替に可哀きなりと云ふと見る程に夢覺ぬ。男驚き騒て
見るに妻無し。起て近き邊に此を求むる。無ければ奇異と思ふ程に本
は無かりつるに枕上に弓一張立たり。此れを見るに夢の形見と云つる
は此を云けるにやと疑ひ思て妻若し尙や來ると待てや。遂に不見
ゆ。以て夫戀ひ悲ふと云へとも。甲斐無し。此れに若し鬼神なむとの變
化したるけるにやと怖しく思ひけり。然りとて今何のいせむと爲る
と思て其の弓を傍に近く立て明け暮れ妻の戀したまふに手に取り
攝巾ひなとして身を放つ事無かりけり。然て月來を経る程に其の弓前

に立たる。俄に白死鳥と成て飛び出て遙に南を指て行く。男奇異と思
て出て見るに雲に付て行くを男尋ね行て見れ。紀伊の國に至ぬ。其の
鳥亦人と成にけり。男然れ。こそ此の只物に非さりけりと思て其よ
を返にける。然て男和歌を讀て云く

あさもよひさの イ かいゆすりゆくみつの

いつさやむさやいるさやむさや

と此の歌近來の和歌に不似たり。あさもよひとの朝めて物食ふ時
と云ふ也。いつさやむさやどの狩する野を云ふ也。此の歌の聞く何とも
心得まじければなむ亦此の語り奥戀く現にとも不思議な事なれど
も舊き記に書たる事なれ。此なむ語り傳へたるとや

今昔物語集 卷第三

一箇抄本

